

## 山田雅楽器のその後 —遺された雅楽管楽器の製作用具—

福持昌之

### はじめに

雅楽器は、管楽器、絃楽器、打楽器に大別され、曲目によって使用する楽器が異なる。そのうち管楽器とは、三管と呼ばれる笙、箏、龍笛の3つに高麗笛、神楽笛を加えた総称である。なかでも箏は、ほぼ全ての雅楽で主旋律を奏でる重要な楽器とされる。

延宝6年(1678)『京都江戸大坂名所案内』や同年『京雀跡追』には、「ふえ尺八」「しやくはち」「志やう」3業種がみえ、その記載をみると笙の職人は笛・尺八も作る様子がわかるが、その逆はなかったことがわかる。リード楽器(ダブルリード)の箏には舌作りの工程が必須であるが、竹取り、孔あけ、漆塗り、樺巻きなど同じ単管の構造を持つ龍笛と共通する工程が多い。その一方で、笙は17本からなる複管の構造を持ち、矯め直し、頭作り、簧作り、帯作り、組立て等の工程が必要で、手数もかかる。おそらく、このような理由から三管の製作が可能な職人は限られていたのであろう。

### 山田雅楽器

雅楽器師としての山田家は、明治6年(1873)、幸治郎(光悦、1879-1934)が下京区高辻通東洞院東入で独立したと伝える。長男幸一(雅幸、1901-1943)の死後、次男仙太郎が家業を継承した。仙太郎はハワイ大学の大学院生の「唐楽の管楽器の製作」調査に協力し、貴重な記録が残された。全一は仙太郎の四男で、昭和50年代に中京区西ノ京に工房を構えた。昭和55年(1980)の日本雅楽器協会設立に尽力し、翌年には会長に就任。昭和58年(1983)、自宅兼作業場を雅楽器博物館として公開し、自ら解説するなど、雅楽の普及啓発に努めた。全一の長男、英明(1959-2017)も雅楽管楽器製作に携わった。

### 国選定保存技術「雅楽管楽器製作修理」

国選定保存技術「雅楽管楽器製作修理」は、昭和51年(1976)、京都市の山田仙太郎(籟仙、1903-1996)、福田泰彦(1926-2018)、名古屋市の菊田金一郎(束穂、1902-1989)の3人が保持者認定された。山田全一は仙太郎の次男で、平成4年(1992)京都府選定保存技術保持者の認定を受け、その後、平成11年(1999)に国選定の保持者認定を受けた。なお、現在は平成16年(2005)に認定された京都市の八幡暹昌(内匠、1937-)が唯一、国選定の保持者である。

### 雅楽管楽器製作における京都の優位性

京都は雅楽器製作の中心のひとつであり、その背景には、

- ① 宮廷音楽としてまた寺社の行事などで雅楽の需要が高かったこと
- ② 箏の蘆舌に使う葦が鶴殿(大阪府高槻市)のヨシ原など淀川河川敷の産が優れていたこと
- ③ 管に使う煤竹は八瀬(左京区)や近江のメダケ(篠竹)が良いとされていたこと
- ④ 笙の簧の材料として重用される唐物の響銅(砂張)が流通する文化・経済の要衝であったことが挙げられる。

## 京都市指定有形民俗文化財「京都の雅楽管楽器製作用具」

- ・名称及び員数：京都の雅楽管楽器製作用具 813点 附 関連資料 14点
- ・所有者及び所在地：公立大学法人京都市立芸術大学（京都市西京区大枝杵掛町13の6）
- ・令和5年（2023）1月27日答申

京都の雅楽管楽器製作用具は、国選定保存技術「雅楽管楽器製作修理」保持者の山田全一（籟全、1934-2019）が生前使用した製作用具一式である。これらは遺族の希望により、京都市立芸術大学へ一括寄贈されたものである。

本製作用具は、雅楽管楽器における三管製作の全工程において、実際に使用されてきた用具が欠けることなく揃っている。その内訳は、構造形成のための用具436点（鑪、寸法竹、小刀、鋸、鑊、矯め木など）、仕上げに必要な用具365点（篋木、漆塗・蒔絵用具、支持用具、樺巻用具、調律用具など）、その他の用具12点（容器類、篩）の合計813点となっている。

## 有形指定の意義と今後の展開

雅楽管楽器製作修理は、国の選定保存技術にも選定された、京都が誇る伝統技術の一つである。そして、本資料群は三管の製作に必要な用具が網羅され、かつ実際に使用されていたものとして、貴重である。また、関連する資料のうち、特に寸法図や製法の記録が14点みつかり、指定の附として一体の資料群として保存をはかる。

今後、木下論文（英文）の内容の検証を進めることや、膨大な紙資料の整理・解読、さらには聞き取り調査などを通じて、京都における雅楽管楽器製作修理の技術やその背景について、さらなる理解が深まることが期待できる。

〈参考文献・映像〉

- ・KINOSHITA, Edean(1969)「CONSTRUCTION OF RYUTEKI, HICHIKI, AND SHO WIND INSTRUMENTS OF TOGAKU IN JAPANESE COURT MUSIC」ハワイ大学修士論文
- ・文化庁文化財保護部（1976）「新指定の文化財—文化財保存技術の選定と認定」（『月刊 文化財』153号）
- ・京都府染織工芸課（1977）「古典 雅楽器」49分、カラー
- ・植木行宣（1992）「雅楽管楽器製作修理」（京都府教育委員会『京都の文化財』第10集）
- ・山田全一（1996?）『笙・箏・笛のわざ—雅楽管楽器製作修理』
- ・畔地慶司（1997）「近世京都の楽器職人と楽器商の系譜—地誌類による」（『東洋音楽研究』63号）
- ・文化庁文化財保護部（1999）「新指定の文化財—無形文化財〔選定保存技術の選定・認定〕」（『月刊 文化財』430号）
- ・文化庁文化財部（2004）「選定保存技術の選定・認定」（『月刊 文化財』491号）
- ・八幡暹昌（2015）『京流 累代雅楽器師 八幡内匠』
- ・東京文化財研究所（2017）『選定保存技術 資料集（平成28年度版）』
- ・前原恵美・橋本かおる（2018）「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告1」（『無形文化遺産研究報告』12号）
- ・東京文化財研究所（2019）『日本の伝統芸能を支える技IV 雅楽管楽器 山田全一』

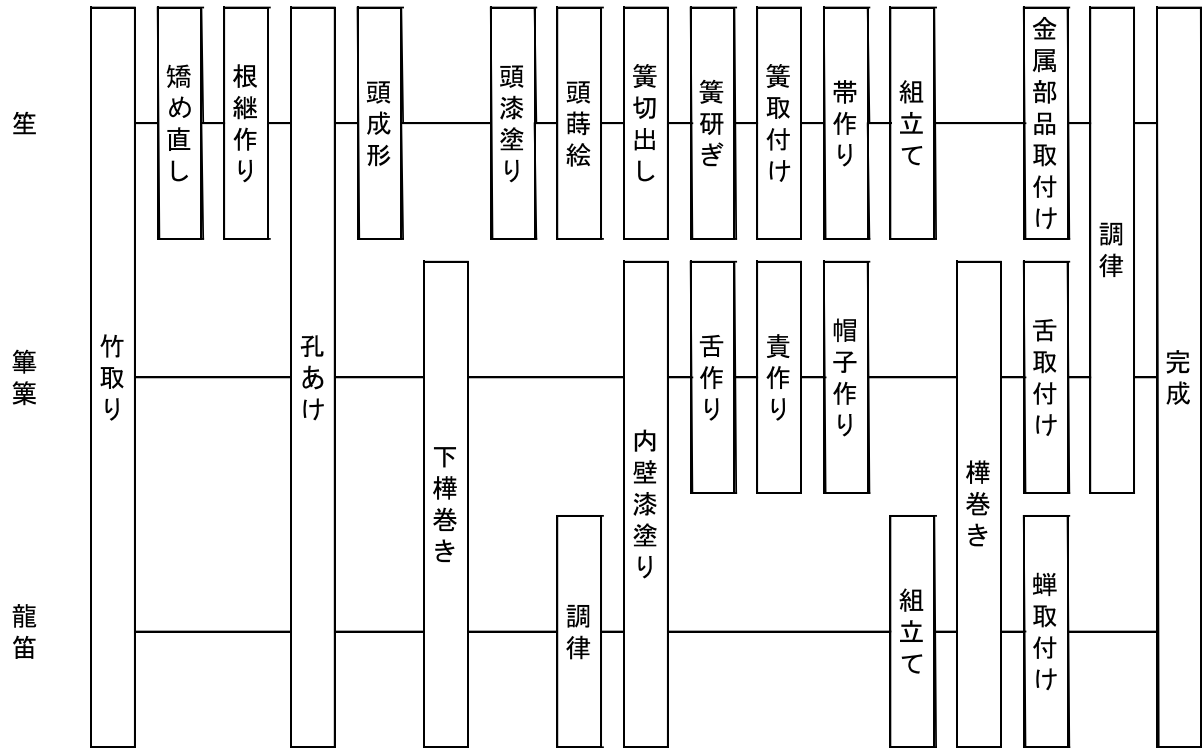
資料1 京都の雅楽管楽器製作用具（京都市立芸術大学所蔵）



資料2 「京都の雅楽管楽器製作用具」の分類表

大分類	小分類	点数	
形成	鉋	7	
	木槌・金槌	11	
	錐	14	
	小刀	51	
	鋸	7	
	寸法竹・物差	70	
	矯め木	5	
	鉋	3	
	鋸	28	
	鑿	3	
	火鉢・炭入用具	17	
	目打ち	5	
	鑢・研磨用品	212	
	磨り皿	3	
			436
	仕上げ	漆塗・蒔絵用具	63
樺巻用具		7	
支持用具		84	
定盤・作業台		34	
調律用具		7	
鋏・喰切		18	
筆・刷毛		34	
ブラシ		9	
箆木		109	
		365	
その他	容器類	10	
	篩	2	
		12	
		813	
大分類	小分類	点数	
附	関連資料	14	

資料3 三管製作の主な工程



資料4 関連資料 14点



**史1 選定保存技術**

1『月刊 文化財』一五三三号(一九七六年六月一日発行)  
二五～二六頁

**雅楽管楽器製作修理**

宮内庁に伝承されている重要無形文化財の雅楽をはじめ、四天王寺、春日大社など社寺に伝承されている雅楽は、千数百年の歴史を持つ我が国最古の伝統芸能であり、八世紀頃の朝鮮、中国、インド、南ベトナム等からの外来楽がここによくおもかげをとどめていることから、世界的にも注目を集めている貴重な楽舞である。笙(しよう)、箏(ひちりきり)、龍笛(りゅうてき)、高麗笛(こまぶえ)、神楽笛(かぐらぶえ)は雅楽には欠かせない管楽器として独特の音色を醸成しているが、

現在、これを製作修理する家は京都市と名古屋市中に数軒あるのみである。近年、管用の煤竹(藁屋根の家の天井に組まれた竹で、いろりの煙で長年月いぶされたもの)のある家が激減したことによる材料不足と入手難、あるいは後継者難により、この伝統の技術の維持保存がむずかしくなっている。

保持者 菊田 束穂(きくたつかほ)

(氏名 菊田金一郎)

(明治三十五年三月八日生)

名古屋市熱田区中瀬町三

菊田家は、祖父の代より熱田神宮の神職をやめて雑楽器師となり、代々束穂を号してきた。当代は二十四歳

よりこの道に専念し、横笛類には定評がある。なお同人は能管をも扱っている。

名古屋市中部日本放送よりC・B・Cクラブ文化賞受賞(昭和四十五年)。

保持者 山田 籟仙(やまだらいせん)

(氏名 山田仙太郎)

(明治三十六年十二月十三日生)

京都市右京区西院下花田町五

山田家は、民間の雅楽演奏家の祖父が明治三十年ごろ雅楽器師となり、孫の現当主仙太郎にその技術が継承されている家である。同人は、十六歳の時からこの道一筋に歩んでき、笙、箏、横笛類管楽器全般をこなす人として定評がある。子息全一が後継者となっている。

東京作家クラブより「文化人間」賞受賞(昭和四十二年)

保持者 福田 泰彦(ふくだやすひこ)

(大正十五年十月三日生)

京都市南区唐橋芦辺町五ノ四〇七号

福田家は、明治の中ごろ祖父が始めて以来、その子の満之助、勤之助兄弟、孫の泰彦(現当主)、光滋兄弟へと技術が継承されてきた雅楽器師の家である。同人は、弟光滋に家業をまかせ製菓会社に勤務していたが、光滋の急死により勤めを捨ててこの道に飛び込み、家業の再興に尽力しており、横笛類、箏、箏をこなし、箏の

芦舌、笙の調律もしている。

NHKテレビ「ある人生」で、笛師の題名で放送される(昭和四十二年)。

2『月刊 文化財』四三〇号(一九九九年七月一日発行)

二二頁

**雅楽管楽器製作修理**

保持者 山田 全一(やまだぜんいち)

(山田籟全)(やまだらいぜん)

昭和九年一月二十六日生

京都府京都市中京区西ノ京月輪町一三三三

重要無形文化財に指定されている宮内庁のものをはじめ、四天王寺、春日大社など各地の大社寺に伝承されている雅楽は、千数百年の伝統をもつわが国最古の伝統芸能であり、八世紀頃の朝鮮、中国、ベトナム等からの外来楽がここによく面影をとどめていることから世界的にも注目を集めている貴重な楽舞である。笙、箏、竜笛、高麗笛、神楽笛は雅楽には欠かせない管楽器として独特の音色を醸成しているが、現在、これを製作修理する者は非常に少なくなっている。また近年、管用の煤竹が入手し難くなる等の材料不足、あるいは後継者難により、この伝統の技術の維持保存が難しくなっている。

山田全一氏は、雅楽管楽器製作修理を専門とする山田仙太郎の四男として京都に生まれ、兄たちが早逝し

ため同氏が父の技術を継承することとなり、まず実際の演奏技法や使用状況を学ぶため、昭和十八年に宮内庁楽部で雅楽の演奏と舞の修業を始めた。その後昭和二十四年に京都に戻り、父の指導で本格的に雅楽管楽器製作修理の修業を始め、その後、さらに技術の研鑽に励み、昭和四十年に独立した。同氏の技術は、平成四年に京都府の選定保存技術「雅楽管楽器製作修理」保持者に認定され、また同七年に京都府伝統産業優秀技術者表彰、同九年に文化庁長官表彰を受けるなど、雅楽の上演に欠くことができない雅楽管楽器製作修理技術者の第一人者として高く評価されている。

3『月刊文化財』四九一号(二〇〇四年八月一日発行) 四一頁

雅楽管楽器製作修理

保持者 八幡 暹昌(やわたたけまさ)  
 (雅号 八幡 内匠)(たくみ)  
 昭和十二年九月三日生  
 京都府京都市

雅楽管楽器製作修理は、雅楽で使用される管楽器の笙(しょう)、篳篥(ひちりき)、竜笛(りゅうてき)、高麗笛(こまぶえ)、神楽笛(かぐらぶえ)の製作修理技術である。雅楽は、古代に中国などから伝わったものを中心に、現在も、宮中や各地の社寺の行事などで上演され、このうち宮内庁式部職業部員によるものは重

要無形文化財に指定されている。雅楽管楽器製作修理は、雅楽の伝承に欠くことができない技術であるが、その製作修理技術者は後継者維などによって減少している。

八幡暹昌氏は、代々雅楽管楽器の製作修理を行ってきた家に生まれ、昭和三十一年に雅楽管楽器製作修理技術の手ほどきを受け、翌年、祖父から直接学んだ技術者に師事して本格的な修業を始め、同三十三年に独立して、さらに研鑽に励み、以後、長年にわたり雅楽管楽器の笙、篳篥、竜笛、高麗笛、神楽笛の製作修理技術者として活躍している。

同氏は、昭和五十九年に京都府第二回産業工芸技術コンクールに入賞し、同六十一年京都府商工会議所一〇〇年以上企業表彰、平成十一年京都府伝統産業優秀技術者表彰、さらに同十三年に京都府の選定保存技術「雅楽管楽器製作修理」保持者に認定されるなどその技術が高く評価されている。

〈保持者の認定解除〉  
 「無形文化財等関係」  
 雅楽管楽器製作修理

保持者 福田 泰彦(ふくだやすひこ)  
 大正十五年十月三日生  
 京都府京都市  
 福田泰彦氏は、昭和五十一年五月四日に、「雅楽管楽

器製作修理」が選定保存技術に選定されたときに、その保持者の一人として認定され、以後、当該技術の保存伝承に努めてきた。しかし、近年体調を崩し、また本人から選定解除の申出がなされているので、その認定を解除する。

史2 山田家の雅号の由来「籟尊」

『大塚葉報』No. 209 (昭和44年(1969)2月)  
 『足立和保「きょうのあじ」(第60回) 京の雅楽器師』

先般、雅楽について取材したとき、下鴨神社の徳田先生より、雅楽器師の山田仙太郎氏について、いろいろお話を承っていたので、12月の中頃、西大路三条を下って一筋目を西に200メートルばかり入ったところにある山田氏のお宅へお話を聞きに伺った。

(中略)  
 古来笙は高貴な人々の愛好する楽器で、新羅三郎が吹いた笙は交丸まじえまるという名器であった。鎌倉時代には信貴山の僧の籟尊が笙作りの名人といわれているので、おそらく山田氏の号の籟仙は籟尊よりとられたとみताが、いかなるものであろうか。

史3 山田家の技術

1『国立劇場開場三十五周年記念公演 平成十三年度

(第56回) 文化庁芸術祭協賛 国立劇場第五一回雅楽

公演 雅楽 千年の音を聴く』(平成13年11月16日)

山田籟全「雅楽器に生きる匠の技」

雅楽の演奏には「管絃」と「舞楽」等があり、その演奏に使われます雅楽器は、管楽器「吹物」・絃楽器「弾物」・打楽器「打物」と三つに分けられ、その中で特に三管と呼んでいるのが笙、箏、篳篥、笛で、笛には龍笛、高麗笛(狛笛)、神楽笛(倭笛)が含まれます。

その三管の「吹物」を、拙宅は五百年の歴史の変遷と共に専門職として製作、修理をして来ました。公に雅楽器の製作が出来る様になったのは、公家とのお付き合いと当時の楽師達の出入りもあり、明治六年(一八七三)当時の太政大臣三條實美卿の布告に従ったことで、現在に至っております。私自身、半世紀以上に渡り雅楽器三管の製作、修理一筋に生きて来ており、しかも拙作の管づくりは分業では無く、木工、竹工、漆芸、金工のほか、蒔絵や螺鈿といった高度な技術が求められるため、日本古来から受け継がれて来ている正統な技法で製作を続けています。音をつくるための音感、籟き、音の質を落とすことなく合わせ、丹念に仕上げつつ良くするのです。そのためには先ず、それぞれの楽器をマスターする事に意味があり、「三管を知って一管を深く知

る」という事から始まり、その後は製作者自身の工夫と、その工夫に依る積み重ねでやっと完成する事が出来るのです。とにかく一人前になる迄には二十年の年月が掛かるのです。

笙、箏、篳篥、笛の主材料は煤竹を使います。茅葺きの家の天井で二百年から三百年自然に燻された皮肌が黒い光沢を放っている良質の竹が最も望ましく、楽器として最高のものなのです。しかし今は、入手が困難になってしまいました。現在拙宅では、後二、三百年分を先祖より祖父幸治郎(光悦)、父仙太郎(籟仙)、私へと引き継ぎ、私なりに常に心して確保してあります。そうして継承者である長男英明の後後まで本物の三管が出来るのです。雅楽器製作は理屈ぬきで体で覚えるもので、好き嫌いとか手先が器用とか、やっついて楽しいからでは一人前の雅楽器師とはいえません。つまり仕事をしていて面白味が分かることによつて長続きするので、一生をかけて修業するという強い信念と共に、精神を込めて作り上げていく姿勢がとても重要な仕事なのです。私が各地の講演で常に強調して言う事は次の三点であります。雅楽器の作品全てに参考になる言葉で、一点は勢い、二点目は色艶(色気)、三点は総体的鮮やかさが有ってはじめて美、芸に繋がるのであるというこ

とです。

雅楽器の製作者である私は、丹精込めて作ったものを何百年後の世まで残すと同時に、天平時代からの歴史をもつ雅楽器の魅力を、より多くの人に知って貰いたい意図から、昭和五十八年全国で唯一の雅楽器博物館を開設しました。日本の伝統音楽、雅楽の用と美を凝らした楽器で、古代から伝わる作品を展示し、現在、運営にあたっています。

(以下略)

2 『GENSHI KAIHOU』49号(平成元年(1989)10月)

「職人さんをたずねて」3、雅楽器編」

今回は、雅楽器の製作者さんである、山田全一師をおたずねして、笙の製作あれこれについてお尋ねしました。御自分でも演奏されるそうですが、あの味わい深い音色を出す笙はいったいどのように作られるのでしょうか?お聞きしてみました。

●—笙の材料はどのようなものですか。

まず竹ですが、煤竹と素竹のどちらから作ります。煤竹は、かやぶき屋根の天井に使われているもので、二・三百年いぶされた、竹の中からよりよい素材を選びます。竹の種類は談竹で、先は肉が付いていませんので、

竹の根元の部分を使います。その中でも肉づきの厚いものを選びます。大名竹というのもありますが、これは使い物にはなりません。これが、管の部分です。頭は、桜などの灌木かんぼくを使いそれを数十年乾燥させたものの上に、漆をぬります。簧したの部分は、地がねと言って、金ざらいという茶道具にも使われているもので、唐沙金とうさはり・佐波理さはりといった地金です。それも音の調子は黄鐘（洋楽のラ）でないといけないのですよ。これを薄く切り、十枚必要の各一枚に音階の調整をきめその上に息洩れを防ぐ孔雀石くじやく・青石せいせきという石の一種を塗ります。その上にもつろうとって、ろうを三十年煮詰めたものを使い、これで調子を合わせます。

●—大ききの違うものがありますが、音も違うのでしょうか。

音階や音の高さは、大きさが違ってても皆同じです。でないと合奏した時に合いませんからね。

●—良い笙の条件は。

材料の面では、節を四本揃えた時、きちんと山のようになる竹を捜さねばなりません。これは、音の響きに関係します。二つの節がそうなって居れば良いのですが、なかなかありませんので一組の節が揃っていれば使えます。

●—その竹を捜し出す割合はどの位ですか。

何十万本の中から、高級なものから並のものも合わせて、五管もできたら上々です。一つのかやぶき屋根の中から探せない時は、三年、五年と竹を得るだけで時間をついやしますし、一年二年待ってもらうことはざらにありますね。形や音などの違いは全くありませんが、頭かしらにつけられている蒔絵などは作る人によっていろいろです。

●—笙の名称を教えてください。

笙は鳳凰の形を型とっています。共鳴音になるのが裏鉸錠うらひやくじょう、くちばしの部分を含む頭、ながい尾の部分鳳尾の竹、人間で言いますと、帯をしめているようなのが帯具、そのそばについているのが、逆輪です。

●—では、素材が手元にとどいてからの製作過程をお教え下さい。

(1) 竹の節を山のようにならんだ形にそろえて切ります。長さは頭もあわせて一尺八寸から普通一尺四寸五分の長さです。竹の数は、十七本ありますがそのうち十五本が音のてるものになっています。

(2) 調子は、竹の内側に音穴とリードによって決めます。外側にある指穴を手移りしながら鳴らすと、決められた音が出ます。

(3) 煮竹の笙の場合、その竹にお鉄漿染めはくろをします。白い竹を煮て、染めることです。そして、艶を出すためにむくの葉で磨きます。

(4) 頭はまず形を切りそろえ、布きせをしてから地漆で塗り、呂色で仕上げます。

●—頭のなかほどの様になっていますか。

中は空洞で塗りがしてあります。

(5) 後は、蒔絵をつけるなどします。『まるで人形の頭やね』と言われますよ。(笑)

(6) そして、菅を差し込む見当をつけて切りざして丸く穴を開けます。

(7) 最後に帯具と逆輪をつけます。作業としては、木工・竹工・漆工・金工に分けられますが、わたくしのところでは、一貫してやっております。分業でされているところが多いですね。

すべての雅楽器をほとんど一人でお作りになるとのこと、本当に感心してしまいました。ありがとうございます。

**史4 三管製作技術の修士論文（ハワイ大学）**

中外日報 昭和44年（1969）5月11日 3面

博士論文に—雅楽器製作の秘法執筆



ハワイ大学の木下さん 短期間で技術を修得

神社や寺院の儀式には欠かせない東洋の秘曲・雅楽の演奏をする笙（しょう）、竜笛、ひちりきの三管のつくり方の文献が、ハワイの日系二世の婦人の手でまとめられつつある。その指導にあたったのは、京都市右京区西大路六角通西入ルの雅楽師・山田仙太郎さん（六六）で「音楽は世界共通のものである」との観点から手ほどきをしたもので、この文献が完成すると、雅楽が日本へ伝わってから千二百年にはじめて世に公開されることになる。

### 雅楽会の組織化も計画

この日系三世の婦人は、ハワイ大学大学院で民族音楽を専攻するイーディン・S・木下さん（二五）で、木下さんはアメリカ・ノースウエスタン大学に在学中、レコードで雅楽を聞いて興味を持ったのがはじまり。

やがて現在のハワイ大学大学院にすんださる四十二年二月、単身で来日。宮内庁楽部の東儀和太郎さんの紹介で、山田さんのもとに日参し、博士論文としてとりあげるべく、雅楽器づくりの弟子入りをしたもの。

最初、山田さんはこの“変な三世”が、テープレコーダーのマイクを片手に、ペンを持ってどここまかに来たこと日本語で質問してくるのに対して、なにをは

じめようとすのかと少なからず躊躇した。というのも、

この雅楽器づくりは跡継ぎ以外には伝授しないという秘伝として引継がれ、山田さんの長男・全一さん（三九）にも、その製作過程のすべてを教えていなかった。

ところが、木下さんの熱意と素質にほだされた山田さんは、自分の仕事をおあづけにしてまでの指導をした。また、演奏ができなければ製作にも工夫が生れないとの信念を持ち、これらすべてをこなせるうえで日本でただ一人の山田さんは、十年はかかるといわれる特殊な演奏技術も教えこんだ。

予定期間七カ月が八カ月にのびて、ハワイへ帰る木下さんは、笙、竜笛、ひちりきの雅楽器の三管をつくる技法を立派に学びとり、農家の天井裏で数十年ススにまみれたものを使つての笙の竹管をトクサでみがく方法、ムクの葉でツヤをだす方法を身につけ、「宮、商、角、徴」など日本人にも難解な音階もすべてこなせるようになった。

ハワイへ帰ってからの木下さんは、ハワイ大学で雅楽の演奏をしたり、五十余名からなる雅楽会を組織したり、田辺尚雄氏の「日本の楽器」林謙三氏の「正倉院楽器の研究」を英訳するなど、精力な活動をするかたわら、山田さんのテープによる学習が二年以上も続けら

れた。

そしていま、木下さんは雅楽器のつくり方を英文で博士論文としてまとめつつある。近く完成する予定だが、印刷したものは山田さんのもとへ届けられ、山田さんはこれを芸大や音楽大の雅楽研究者にも公開する考えをもっている。

なお、雅楽に関する文献は、天平時代に雅楽が中国から伝わってきたころに、同時に入った「楽家録」という漢文体のものがわずかにあるが、山田さんがあみだした製作法は、詳しくは製作にふれていない。

**山田仙太郎さんの話** Ⅱ つくづくよいことをしたと思う。最初のうちは、門外不出の技術をハワイあたりにまきちらすことにとまどったが、木下さんは雅楽を本当にいっくしむ人とみたので手ほどきした。二人とも、言葉が通じにくいには困ったが、音楽というものは言葉を超えた力を持っているためか、すらすらと体得してくれた。論文の送られてくるのが楽しみです。